



ご挨拶

教育委員長 甲斐未来男

KD Japanは非営利のダイビング指導団体として、1968年に発足し2008年をもって40周年を迎えました。スクーバの歴史でいうと、クストーとガニアンが、開放式スキューバを1943年に完成させたその25年後に発足したことになります。

40年という長期にわたり、現在も活動できているのは、村上名誉会長を初め、各支部長並びに諸先輩の方々の努力の賜物であり、KD Japanのメンバーの方々の誇りでもあります。

一方、昨今のダイビング指導団体の情勢という、1995年以降は新規の認定ダイバーが減少しており、ダイビング指導団体としての存続自体が、厳しい環境にあります。しかしながら、KD Japanは非営利団体であり、営利目的の指導団体ではないため、それとは無関係に運営できます。

KD Japanは、クラブ制・会員制という組織で運営しています。これは、ダイビングは単独ではなく、必ずバディで潜るという原則を守り、ベテランダイバーによる初心者へのきめ細かな指導のもと、活動するものであるという理念を持ち、この理念が今も継承されてきたことが、40年という歴史を築き上げ、今もなお活動できている最大の要因であると確信しています。

また、近年のKDの出来事としては、世界中で連盟（CMAS）より公認を受け、直接的に承認されたダイビング指導団体となりました。ご存じのように、CMAS（クマス/英語圏ではシーマス）はクストーの作った国際潜水指導団体であり、ダイビングの教育プログラムを世界中に広めダイビング教育方法を普及させた団体です。

このCMASとの直接契約により、KDメンバーの方々のCカードも、今ではCMAS本部（イタリア）より直接購入し、カード裏面を印刷後メンバーの方々へ配布いたしております。

そのほかにも、多数のインストラクターの方々との協力のもと、KDダイビングマニュアルの作成やKD指導認定基準書の改訂などを行って参りました。

ダイビング器材においてもこれまで格段の進歩を遂げ、当初のダブルホース式から現在ではシングルホースレギュレータへ、アナログゲージからデジタル式ゲージへ、ハーネスからBCDへ、さらにはダイビングコンピュータまでと進化してきています。

また、1990年の後半には閉鎖循環式スクーバも本格的にラインナップされ、次世代のスポーツダイビング機材として、期待されています。

最近では、インフレーターホース（蛇腹）のないBCDや新しい減圧理論を取り込んだダイビングコンピュータ等、更なる進化を遂げた、さまざまな製品が販売されています。

しかしながら、機材の進歩とは裏腹にダイビング中のトラブルは減ってきていません。ダイバーの加齢や指導方法・ガイドダイバーの安全対策不足など様々な原因はあるものの、その推移は下がってきたとは言えないのが実情でしょう。

今後も、これまで以上にメンバーの方々と共に、安全なダイビングを心がけ、KD Japanの歴史に恥じることなきよう、微力ではありますが、活動いたす所存です。

最後に、この40周年という記念する年に、教育委員長として任命いただいたことを光栄に思います。

諸先輩方をさしおき、誠に恐縮ではありますが、このような掲載をさせていただきました。